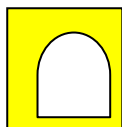


# 日吉台地下壕保存の会会報



第112号

日吉台地下壕保存の会

## 第17回 戦争遺跡保存全国シンポジウム 岡山県倉敷大会開催される



開会セレモニー

2013年8月17日～19日に岡山県倉敷市水島で戦争遺跡保存全国シンポジウムが開催されました。この地は三菱重工業水島航空機製作所があり、大軍需工場地で、戦争末期になると、その疎开工場として亀島山地下工場がつけられました。この工場は主に朝鮮人労働者によって掘削され、養成工出身の若い工員を中心に、女学校から動員された学徒などが働いていたところです。まさにアジア太平洋戦争の特徴の1つである総力戦、そして総動員体制の実像を備えている場所です。この地から戦争遺跡保存・活用の重要性を進める運動を発信することは大変意義のあることです。

ドイツからミッテルbau＝ドーラ強制収容所記念館館長のヴァーグナーさんをお招きし記念講演が行われました。ドイツでの戦争遺跡の保存・活用、そして現在ドイツで起きている問題点などを話され、歴史的想像力を如何に失わないように保存することの重要性を訴えられました。我々が直面している問題と共通することが多々あり、我々の運動と重ね合わせながら聞きました。詳細は当会報 p6 をお読みください。

基調報告として菊池実氏が戦争遺跡保存の現状を詳細に報告されました。全国紙・地方紙記事、学会などの報告、今現在も行われている沖縄の遺骨収集などを実証的に述べられ、また、軍事遺跡の視点からではなく、もっと幅広く戦争に関連するあらゆる遺跡として戦争遺跡をとらえ、それから何を学ぶのが重要であり、昨今の政治状況から保存運動の意義が問われていると強く訴えられました。

日吉台地下壕保存の会からは11名の方が参加し、2つのレポートを報告しました。

### 目 次

第17回戦争遺跡全国シンポジウム岡山県倉敷大会報告	1p
お知らせ：第21回横浜・川崎平和のための戦争展2013	2～3p
報告 第17回戦争遺跡全国シンポジウム	
レポート 日吉台地下壕群を国の文化財に 大西章	3～4p
レポート ガイド養成講座の再出発 石橋星志・山田譲	4～6p
記念講演 『ドイツの戦争遺跡…犠牲者に想いを馳せて』	(遠藤)6～7p
第1分科会(谷藤)・第2分科会(亀岡)・第3分科会(小山)	7～10p
見学会 倉敷1日コース(大西)	10～11p
倉敷岡山1日コース(中沢・石橋)	11～13p
報告 航空本部等地下壕の工事(長谷川崇)	13p
寄稿 元暗号兵からの手紙(新井安吉)	13～14p
報告 取り壊される普通部本校舎を見学して(阿久沢武史)	14～15p
連載 地下壕設備アレコレ(その9)(山田譲)	15p
活動の記録	16p

**お知らせ****第21回横浜・川崎平和のための戦争展2013 実施要綱****1.趣旨および経緯**

敗戦から68年が経ち、人口の80パーセント以上を、戦後生まれが占めるようになりました。遠くない将来に、「アジア太平洋戦争」は歴史教科書の用語として、年号を記憶するためだけのものになってしまうかも知れません。それは私たちもそうであるように、歴史上の出来事はどの時代のどの国の出来事であろうと、人の命や生活がかかわっている事まで、想像することは難しいからです。人間のみならず人間性をも破壊してしまう、戦争という無比の愚行を、私たちが繰り返さないためには、具体的な「ヒトとモノとコトバ」で解りやすく具体的に伝える必要があるでしょう。

日吉台地下壕群と、登戸研究所は、現在見て、触れることのできる稀有な戦争遺跡です。年いちど20年間開催してきた「横浜・川崎平和のための戦争展」は、その実相を知ってもらうための一翼を担ってきました。登戸研究所については明治大学が、2年前に当時の建物の一部を整備し「明治大学平和教育登戸研究所資料館」として、開館しました。

いっぽう、日吉台地下壕群については、慶應義塾は私たち日吉台地下壕保存の会の地下壕見学案内について理解を示してくれているとはいえ、保存され、それが歴史教育に生かされるかといえ、その保障は不透明です。今春、隣接する民有地の宅地開発により航空本部地下壕の一部が破壊されました。法律上仕方がないとはいえ、出入口と集水槽らしきコンクリート構造物が重機によって壊され、十分な調査をされることもなく、擁壁に塗りこめられてしまいました。無念でなりません。2008年、同じ地下壕の慶應義塾側の出入口が出土したときは、慶應義塾は次のような措置をとりました。直ちに体育館建設工事を中止し、専門的調査研究を行い、諮問委員会を設置し、その答申に従い60m移動して体育館建築を行ったため、貴重な戦争遺構は破壊をまぬがれました。

慶應義塾側にも民有地側にも、まだ地中に眠り、それゆえに戦争当時のままの姿を残す地下壕が数ヶ所あります。これらは、なんとしても歴史の証人として、次世代に引き継がなければなりません。それは、行政と私たち市民の責務ではないでしょうか。

第21回目の今年は、「日吉台地下壕・登戸研究所を国の登録文化財に」をテーマに掲げて、慶應義塾日吉キャンパス来往舎にて開催します。12日には昔を語る紙芝居と、恒例の「若者の発表」では4組の若者が研究成果を発表します。13日にはシンポジウムと、フリージャーナリスト綿井健陽さんのドキュメンタリー映画「Little Birds～イラク戦火の家族たち」の上映と、氏の講演「開戦から10年～イラク戦争と日本」がおこなわれます。また、写真や実物展示、学徒出陣70年目の年に、戦時下の慶應義塾についての展示もあります。どうぞお誘いあわせのうえ、ご来場くださいますようお願い申しあげます。

**2.テーマ 《日吉台地下壕・登戸研究所を国の登録文化財に》****3.主催・後援・実施団体**

主 催 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会

後 援 横浜市港北区(予定)

実施団体 日吉台地下壕保存の会・登戸研究所保存の会・蟹ヶ谷通信隊地下壕保存の会・川崎中原の空襲・戦災を記録する会

**4.代 表** 大西 章 日吉台地下壕保存の会・慶應義塾高等学校教員

**副代表** 姫田光義 登戸研究所保存の会・中央大学名誉教授

新井揆博 日吉台地下壕保存の会・蟹ヶ谷通信隊地下壕保存の会

大図建吾 登戸研究所保存の会

渡邊賢二 登戸研究所保存の会・明治大学講師

松元泰雄 川崎中原の空襲・戦災を記録する会

**顧 問** 白井 厚 慶應義塾大学名誉教授

5.開催日程 2013年10月12日(土) 9:00～13日(日) 16:00  
 6.会場 慶應義塾日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース・イベントテラス  
 入場無料 事前予約不要

## 7.内 容

☆展 示 写真パネル・実物資料・調査研究資料など  
 日吉台地下壕／蟹ヶ谷通信隊地下壕／登戸研究所／中原空襲・戦災／  
 戦時下の学園（学徒出陣70年）

☆講演・シンポジウム・文化行事 於 来往舎シンポジウムスペース

12日(土) 開会式 13:30～45  
 中原今昔かみしばい（おと絵がたり） 13:45～14:00  
 若者の発表「戦争の記憶をひきつぐ」 14:00～16:00  
 13日(日) シンポジウム 10:30～12:00  
 日吉台地下壕・登戸研究所を国の登録文化財に 菊池実氏ほか  
 映画上演「Little Birds～イラク戦火の家族たち」 13:00～14:40  
 記念講演 「開戦から10年～イラク戦争と日本」 14:50～16:00  
 綿井健陽氏（フリージャーナリスト／映画監督）

8.運 営 実施団体で実行委員会を組織し企画運営にあたる

9.連絡先 亀岡敦子 T&F 045-561-2758 森田忠正 T&F 044-911-2726

## 報告

## 第17回戦争遺跡全国シンポジウム岡山県倉敷大会報告

### ○第1分科会レポート 日吉台地下壕群を国の文化財に ～航空本部等出入口の破壊～

日吉台地下壕保存の会 大西 章



図1 日吉台地下壕配置図

旧海軍日吉台地下壕群の一部が宅地開発のために破壊されました。

その場所は民有地にあり、10年前にマンション建設工事のために地下壕が壊されかけましたが、近隣住民の反対運動などにより、工事が中断されました。

しかし、今年3月に突如開発工事が始まり、航空本部等出入口、沈殿槽、出入口前の通路など遺構の一部が破壊されました。現在も工事が続行されていますが、これ以上の破壊が行われないように監視活動を続けています。

工事をやめさせる権限がない中で、どれだけ保存が出来るかわかりませんが運動を継続していくと、同時に、この日吉台地下壕群を文化財にする働きかけを横浜市、慶應義塾にしています。

### ☆保存の会の活動

- ・工事の監視活動
- ・所轄官庁への要望書とその回答
- ・マスコミへの連絡
- ・工事許可の法的根拠の調査
- ・地元選出の横浜市議員への働きかけ
- ・地元自治会への働きかけ



- ・慶應義塾との連携
- ・署名運動の協力
- ・看板の作製

#### ☆まとめ

現在工事の中止及び遺構の発掘調査・測量までに運動が至っていないが、新たな大きな地下壕の破壊は今のところ行われていない。継続的な監視活動などを通して、これ以上の破壊が行われないよう見守って行きたい。

また、一度許可された開発工事を差し止めることは法律的に困難である。開発許可がおりる前に、『周知の埋蔵文化財包蔵地』などの指定を受けて、簡単に破壊されないように前もって保存運動を進めておくことが重要である。

日吉台地下壕群を史跡指定にするように横浜市、神奈川県及び文化庁そして慶應義塾に訴えかけて

きた。しかし、行政側は受身の姿勢を崩さない。すなわち、近代遺跡として貴重なものとは認めるが、保存に関しては文化庁は地元から意見が来ないので動きようがない。また、市の教育委員会は資料にみられるように国からの文化財保護法指定がないので保全は困難である。このような行政側の無責任な姿勢を改めさすような継続的な運動を全国的な規模でやる必要性がある。



図2 擁壁で埋められる前の出入口(7a)

### ○第3分科会レポート ガイド養成講座の再出発 講座の再検討と定着まで

日吉台地下壕保存の会 石橋星志 山田譲

#### 【はじめに】

- ・ガイドに関連する、日吉台地下壕保存の会からの過去の報告
  - 第10回群馬県みなかみ大会の第3分科会で岩崎・喜田「戦争遺跡の活用と次世代への継承のために助成金事業応募と日吉台地下壕保存の会の活動」として報告あり
  - ・第11回東京大会(国立)の第1分科会で渡辺「日吉台戦争遺跡ガイド養成講座を受講して」として、第1、2回養成講座参加とガイドの経験を報告あり
  - ・第15回神奈川県横浜大会の第1分科会で渡辺・長谷川・中沢「2年余りつづいているガイド学習会について」として、「ガイド事例集」発行までの報告あり(会報103号)

#### 【報告の目的】

- ・日吉でのガイド養成講座の振り返り
  - 2005年開始。講座開設の理由と現在までの経緯の確認
- ・ガイド講座の再検討・再構成を経て行った昨年度の講座を振り返る
  - 最終的に6名がガイドとして継続して活動に参加することに
- ・他の団体への参考になるのではないかと
  - ガイドは保存運動の中心となる見学会を左右するも、後継者は？

何らかの運動経験者以外のガイド候補者をどう育てるか、日吉版の考え方の明示

- ⇒ 保存活動の継続や戦争遺跡の文化財指定時にも、ガイド活動を通じての戦争遺跡の活用は不可欠

#### 【ガイド養成講座の経緯】

- ・2005年度に、地元港北区の助成事業に、ガイド養成講座と見学会資料の作成で応募、助成金を得る。
  - ・初年度は受講者多数も定着は2名。翌年も昨年度参加者のガイド養成の方向を打ち出し、継続

・2010年度までに5回行うも、ガイドデビューは計10名程度、0人の回もあり

### 【これまでのガイド養成講座の反省】

・視点や認識、軸となる問題意識などを問われる話が多く、何度かフィールドワークはあっても、連合艦隊司令部地下壕へは1～2度しか入らず、すぐにガイドとして話すよう求めている

・座学とフィールドワークを組み合わせた構成も、講座内容と実際のガイド活動が必ずしも結びついておらず、ノウハウもうまく伝えられず、「ガイドは難しい」との感想が多かった



報告者 石橋星志氏

### 【ガイド養成講座の課題】

・会の発足から20年以上が経過し、世代交代も進み、以前の会の活動や経緯を知らないメンバーが増えた

・戦争から70年近くが経過し、軍事知識を持たない世代も多く、ガイドの話す内容がよく分からないと感じる人が増えた（ガイドされる側だけでなく、ガイドする側にも）

・ガイド活動をするためには、以下のような少なくとも3段階のプロセスが必要

前提として、受講者は日吉の戦争遺跡に何らかの興味関心がある人たち

- ①ガイド養成講座で事実関係や新たな事実を知る→②興味関心を広げ深め、考える
- ③事実や考えたことを他の人に伝えたいと感じ、ガイドをはじめる
- ④ガイド活動のやりがいや面白さを感じ、活動を継続する

### 【「ガイド事例集」の発行】

・ガイドになったものの「何を話していいのかわからない」という声があり、ガイドそれぞれが何を話しているのかを確認する意味もあり、「ガイド事例集」の作成を行い、2012年春発行

- 各ガイドが自分の話していることを口語体ベースで持ち寄り、集成
- ガイドポイントごとの参照資料も簡単に記述するスペースを設ける

### 【2012年度ガイド養成講座の変更点とその理由】

・学習の際には、概論から各論のように、考え方やものの見方を問う所からスタートするのではなく、いくつかの具体論から全体が見えるような構成に変更

- 体験を増やし、そこから自然に結論が出てくる構成へ

視点の広がりや活動の中で身につけられるようにする

・外部講師になるべく頼らず、ガイドメンバーが自身の経験や知識を生かすことで講座を構成する

- 身近に感じてもらうこと、ガイドメンバーの考えを知ってもらうことで、ガイド活動のイメージを持ってもらい、ガイドとして参加しやすくする

・見学会にガイドする側として参加してもらい、講座の半分をそうしたガイド体験に割り当て

- 壕内の照明点灯・消灯、誘導などの仕事も分担し、自分のことから参加してもらう

見学会の雰囲気を知り、現在のガイドメンバーと話す機会を増やし、説明へと促す

### 【ガイド養成講座の再検討のヒント】

・報告者のうち、石橋は、この4年間、出身地域の公民館で、公民館主催の成人学級に参画

- リタイア前後の世代が学級生の中心：座学中心の、大学の講義のような構成は無理
- ⇒できるだけ現場に立つようにしたり、学級生の目線や感覚を意識して講座や講義を実施

◎こうした経験を踏まえ、日吉のガイド養成講座の変更を考え、他の運営委員の助言を

得て、一部内容を変更し、講座内容を確定

【引き続き大事にした点：多彩な内容】

・開始当時から、座学とフィールドワークの組み合わせで、複数回のフィールドワークを行うなど、受講者に肌で感じてもらう部分があった

→ 再検討の際には、会の成り立ちや、空襲体験者の証言を加えるなど、実感や共感につながる内容を付加し、多彩な内容を強化。体験者の聞き取りや話を入れることで、戦争遺跡以外の戦争のリアリティーや、考え方を知り、参加者それぞれが考える機会とした

・フィールドワークに加えて、見学会への参加（見学会の運営補佐）を講座の半分設けることで、見学会の流れを知り、ガイドする実感を持ってもらうように努めた

【今回の報告、残された課題】

成 果：昨年度は6人、今年度は3人のガイドがデビュー、満足度も高い結果となった  
これまでのガイドメンバーも、新たに認識することも多く、興味の尽きない

講座に残された課題：見学希望にガイド数が追いつかない、ガイドの高齢化→継続して獲得できるか。見学者が変化、戦争の捉え方も様々、どうガイドするかを絶えず検討する必要  
ガイドとしてのデビュー後のフォローや学習をどうするか

→ ガイドが集まり学習会を継続、2011年に「ガイド事例集」発行

※残された課題に対し、どう対策を考え、新たな養成講座にフィードバックしていくか  
ガイド養成講座のあり方、ガイドのあり方も含め毎年第3分科会で話し合い・交流したい、戦跡保存のために、各地の戦争遺跡保存団体や全国ネットでの活発な取り組みが必要

## ○記念講演

「ドイツの戦争遺跡…犠牲者に想いを馳せて」から学んだこと 遠藤美幸（運営委員）



イエンス・クリスティアン・ヴァーグナー氏

8月の猛暑の中、岡山県倉敷市水島で第17回戦争遺跡保存全国シンポジウム（岡山倉敷大会）が開催された。今回は、ドイツ中部のテューリンゲン州ノルトハウゼンにあるミッテルbau＝ドーラ強制収容所記念館のイエンス・クリスティアン・ヴァーグナー館長が来日され、ナチス政権下の強制労働の実態、記念館の役割、ドイツの戦後に関する課題などについて講演された。

### ミッテルbau＝ドーラ強制収容所とは？

第2次世界大戦下の1943年8月、英軍の空爆によりドイツの軍需産業は大打撃を被った。これを契機に、ヒトラーは空爆の危険なくドイツの秘密兵器V2ロケット開発を行うために地下工場の

建設を決意した。1943年から1945年の約2年間、テューリンゲン州のミッテルbau＝ドーラ強制収容所では、ソ連、フランス、ポーランドなどから約6万人の囚人（主に政治犯）が集められ、ロケット地下工場の建設とロケット兵器の製造を強いられた。

### 地下坑内の強制労働の実態

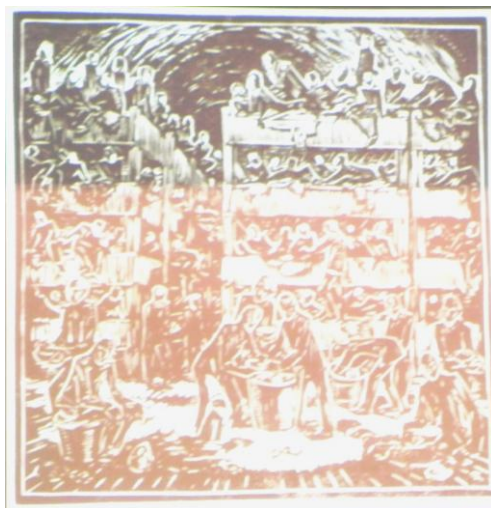
1943年8月末に最初の囚人がミッテルbau＝ドーラ強制収容所に移送された。皆同じ縦縞の制服を着用させられた。地下坑内は、ロケットの地下工場建設の作業場だけでなく、彼らの生活の場でもあった。坑内爆破による凄まじい騒音と粉塵、ボーリング作業による熱風と蒸気、散乱する死体から発する腐乱臭。木製の4段ベッドは過密状態で睡眠が取れる状態ではなかった。半分に裁断されたドラム缶の共同トイレ。あちこちに散乱する汚物と夥しい害虫。数週間で死亡率が上昇し、最初の囚人は全滅した。



1943年12月で630名が、1944年3月までに5000人が死亡したという記録がある。危険な作業はすべて囚人による強制労働とし、彼らは極めて劣悪な環境で働かされ、ミッテルbau＝ドーラ強制収容所だけでも2万人以上の囚人が死亡した。

### 戦後ドイツの問題

ヴァーグナー館長は、戦後ドイツにおける「戦争責任」の問題点をいくつか指摘した。1つに、ドイツ人のホロコースト（大虐殺）に対する無知である。ナチ犯罪は、ポーランドのアウシュビッツのような絶滅収容所だけでなく、ドイツ国内の無数の強制収容所や外部収容所で、ドイツ人の日常の中で行われていたことをドイツ人は長らく知らなかった。2つに、東西ドイツの分割により、ナチ犯罪が共産主義と資本主義の対立の中で政治化され、責任の究明が曖昧にされ遅れたこと。3つに、ミッテルbau＝ドーラ強制収容所への攻撃や批判について。例えば、ナチ復活を望む「ネオナチ」による収容所などの施設への落書きや攻撃。4つに、戦争被害者はドイツ人も同じで、もっとドイツ人の犠牲者に関心をよせるべくだと主張するドイツ人の存在など。戦後ドイツにおいても戦争犯罪の証拠としての「戦争遺跡」を後世に残すことは簡単ではないことがわかった。



強制収容所内の様子(版画)

### 学んだこと

今回、はじめて倉敷市水島を訪れた。太平洋戦争末期、この地に軍用機製造のため全長約2000メートルに及ぶ亀島山地下工場が掘られた。採掘工事に多くの朝鮮人労働者が過酷な強制労働を強いられた事実を知った。その体験者であった在日コリアンの金原哲さんの「作業が長引いたり、失敗すると、特高が朝鮮人を地べたに座らせ、殴る、蹴る、背中を踏みつけるなどの暴行を加えた」との証言を読みながら、同時にミッテルbau＝ドーラ強制収容所の犠牲者の「声なき声」を聞いたような気がした。

ヴァーグナー館長は「囚人たちが働いていた場所を復元するより、何万もの人が強制労働させられていた地下工場跡を残すことが大切だ」と話した。見た目に分かりやすい「復元」は、歴史的想像力を鈍らせる恐れがあるからだ。ありのままの地下工場跡を後世に残し、歴史的な背景を学びながら戦争犯罪の現場を想起することが大切だと思った。これは、私たちの日吉台地下壕保存の会の活動にも活用できる視点であるだろう。

戦争により不条理で非業な死を遂げた犠牲者の想いを忘れないためにも、戦争遺跡を保存し継承する取り組みを真摯に行っていかななくてはならないと改めて心に強く思った。

## ○各分科会報告

### ○第1分科会 「保存運動の現状と課題」報告

谷藤基夫（運営委員）

- ①「全国レベルで見た亀島山地下工場の特徴」 亀島山地下工場を語りつぐ会（上羽修）
- ②「『本土決戦陣地』手結砲台調査と課題」 平和資料館・草の家（福井康人）
- ③「戦争遺跡としての「営内神社等」その現状と課題  
—「航空神社」の事例を中心に—」 文化資源学会（春日恒男）
- ④「『謝罪と不戦平和の誓い』碑について」 ABC企画 731部隊遺跡  
世界遺産登録を目指す会（和田千代子）
- ⑤「日吉台地下壕群を国の文化財に」 日吉台地下壕保存の会（大西章）
- ⑥「ガマ・壕の調査活動からみえるもの」 沖縄平和ネットワーク（大田玲子）
- ⑦「『震洋』『回天』『海竜』等水上、水中特攻となった油壺東京大学大学院理学系研究付属  
臨海実験場を訪ねて」 貝山地下壕保存する会（原田弓子）
- ⑧「横須賀航空隊知られざる過去帳」 貝山地下壕保存する会（池田直人）



第1分科会

第一分科会では上記のように、今年も「保存運動の現状と課題」というテーマに沿って全国から8名が発表されました。日吉台地下壕保存の会から大西章会長が航空本部地下壕の開発による破壊の問題を行政や地域、マスコミとの対応を含めて詳細に報告されました。冒頭司会者からテーマに沿った報告とともにそれぞれの地域の課題に重点を置いた報告を要請しましたが、その要請に沿って会の置かれた現状と課題が映像とともに明らかにするものでした。他の会からは岡山の「亀島山地下工場」、高知の『本土決戦陣地』手結砲台、沖縄の「ガマ・壕の調査活動」、横須賀の「油壺特攻基地」「横須賀

航空隊」基地などそれぞれの地域の現状の報告に重点が置かれたものが多かったのですが、文化資源学会の「宮内神社・航空神社」の報告のように全国に広がる戦争遺跡をその内容によって細かく分類し、特質を明らかにしようという試みもあり、また731部隊碑の設立運動のように国内諸地域に留まらない国際的な取り組みの報告もありました。限られた時間の中でどの報告も特徴のあるもので、保存運動の積み重ねと深まりを感じさせられました

### ○第2分科会「調査の方法と整備技術」報告

亀岡敦子(運営委員)

第2分科会は、上記のテーマに即して6本の報告が行われました。この分科会は、実際に行われた調査や研究についての具体例なので、どの報告も大変興味深いものでした。

- ① 山梨県上野原市西原地区のB29機・屠竜機墜落地点および西原防空監視哨の戦争遺跡調査報告」山梨県戦争遺跡ネットワーク(十菱駿武・清水勇希・安藤正文) 山梨県の山間地にある西原地区戦争遺跡(B29の墜落地点・聴音壕など)の詳細な調査が、聞き取りや、小学生の地域学習との繋がりについても言及している。
  - ② 日本軍機の墜落と関係碑」戦争遺跡研究会(清水啓介) 日本軍機の墜落地を特定し、碑の建立の有無と建碑者についての綿密な調査報告である。
  - ③ 「2照聴所1砲台型の防空砲台の遺構」空襲戦災を記録する会全国連絡会(工藤洋三) 山口県徳山市(現周南市)に残る海軍防空砲台の実地調査報告で、今後見学などの活用の計画も浮上とのこと。
  - ④ 「取り壊し迫る旧中島飛行機武蔵製作所〈変電室〉の保存をめざして」武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会(牛田守彦) 1938年に武蔵野市に中島飛行機が開設されたことは、よく知られているが、唯一のこる変電室の保存をめざしての多角的調査についての報告。
  - ⑤ 「三菱熊本航空機製作所他の特殊地下壕と荒尾二造変電所跡の保存」玉名荒尾の戦争遺跡をつたえるネットワーク(高谷和生) 熊本市の東部地区は、陸海軍の飛行場や軍需工場跡が多くこの軍都であった由。地下工場や特殊地下壕の調査研究が近年盛んになった。
  - ⑥ 南国市指定史跡〈前浜掩体群〉5号掩体の調査と公園整備」南国市教育委員会(油利崇) 南国市は7基残る掩体を平成18年には市の史跡に指定しており、そのうちの1基の発掘調査報告が、教育委員会の職員によって行われた。従来地表面の高さで使われていたと考えられていたが、半地下式構造であったことや車輪誘導溝の存在などが判明した。
- 6本の報告を聴いて、保存と活用を訴える場合、その裏付けとなる調査研究がいかに重要か。そしてその調査は身近なところ、私たちの足元から丁寧に行うべきこと、がよく分かった分科会でした。

### ○第3分科会「平和博物館と次世代への継承」報告

小山信雄(運営委員)

#### 1. 「ガイド養成講座の再出発 講座の再検討と定着まで」

日吉台地下壕保存の会 石橋星志 山田譲



・保存運動の中心となる見学会を左右する「ガイド」の養成について、2005年に開始された「ガイド養成講座」の現在迄の経緯や、今後の課題などについて報告がありました。会の発足から20年以上が経過し、世代交代も進み、以前の活動経緯を知らないメンバーや軍事知識を持たない世代も増え、ガイドの話す内容がよく分からないと感じる人々が増えてきた状況を鑑み、ガイド活動をするためには、少なくとも以下3段階のプロセスが必要。①ガイド養成講座で事実関係や新たな事実を知る ⇒②興味関心を広げ深め、考える ⇒③事実や考えたことを他の人に伝えたいと感じ、ガイドを始める ⇒④ガイド活動のやりがいや面白さを感じ、活動を継続する。又、実践的な口語体ベースでの「ガイド事例集」の発行経緯(2012年春)、講座開始当時から行って来た「座学とフィールドワークの組み合わせ」に加え、新たに「体験者の証言」や「見学会の運営補佐」などを取り入れ、講座のグレードアップを図って来ている内容が紹介されました。

## 2. 「中学生の歴史・平和学習を引き継ぐ「日本焼結工場跡」の測量」

松代大本営の保存をすすめる会 阿藤満政 北原高子

・「戦時中の鉄不足を補うため、赤土に含まれる酸化鉄から鉄を作る(焼結)」という方針の下、1944年春から1945年敗戦時迄、長野県黒姫山の麓の工場で、赤土の採取、貯蔵、燃焼(焼結)などの作業が行われていたことが、1986年の地元の中学校文化祭でのクラス研究で初めて明らかになりました。作業には500名を超える人々(中国人、朝鮮人、中学校生徒、付近の婦人など)が動員され、当時の過酷な状況(強制労働)など全体像の解明に取り組んで来た経緯が紹介されました。この活動の中心人物である峰村勉氏は昨年不慮の事故で他界されてしまいましたが、このテーマを手掛かりとして「戦争と平和の課題を中学生なりに考えて行きたい」「いつでも世界に向けて、自分の生き方を考えてゆける人になって欲しいというのが一番の願いである」との、氏の言葉はとても印象的でした。

## 3. 戦跡保存と強制連行補償運動

～愛知県大府飛行場 中国人強制連行被害者のための補償要求運動を例に～

愛知・大府飛行場中国人強制連行被害者を支援する会 南守夫

・名古屋市の南郊外に広がる広大(59万坪)な丘陵地帯に、「三菱重工名古屋航空機製作所」や「陸軍航空本部名古屋建設隊知多工事本部」、「大府飛行場」などがあり、工場や滑走路の建設に、地元住民や朝鮮人労働者のみならず、多くの中国人が強制労働に従事させられていた事が、戦後50年以上経って漸く明らかになり、現在「強制労働に従事させられた中国人」からの訴えを「該当企業」に対し行っている状況について報告がありました。「戦争遺跡において人権侵害あった場合、戦跡の保存運動だけで良いのか?被害者への補償がきちんと考えられているのか?多くの施設は『強制労働』は有ったので、この問題も含めなければ、全体的取り組みをしていることにならないのではないか!」という問題提起がなされました。

## 4. 高知県香南市野市町上岡戦争遺跡見学会と香南市戦争遺跡

～戦争の記憶を次世代へ伝える取り組み～ 高知県江南市文化財センター 松村信博

・高知県内の平和資料館「草の家」の学芸員と地元青年からの「戦争遺跡について何らかの形で公開してほしい」との声により、平成25年1月に、「上岡山の海軍地下壕」や「上岡地区の被爆の痕跡(石垣・壁の弾痕、被爆鳥居、壊れたままの狛犬など)」の見学会が初めて行われ、上岡地区に多くの戦争の傷跡が残されている事が知られる事になりました。8月には「夏休み戦争遺跡バスツアー」が行われ、戦争体験の語り部としての神社総代の中屋氏による、「戦争体験を持たない世代」への語り継ぎにより、「戦争体験が次世代にリレーされるツアー」の実現となりました。地域で何があったのか、先ず戦争中のことを「知る」ことから始めなければと、戦争遺跡、体験談、民具、他すべての戦争関連資料を「香南市戦争遺産」と位置付け、平和資料館「草の家」や地元の協力の下、市内の戦争遺跡として纏められています。

## 5. 「戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会」の20年

戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会 福林 徹

・1994年の会結成以降の組織活動内容の説明、京都府内、府外、及び海外（フィリピン平和ツアー）などのフィールドワークについて、宇治火薬庫の遺構の保存要望などの戦争遺跡の保存について、及び元B29捕虜飛行士による講演会などの学習会について、更に、展覧会、出版物の内容についてなどの報告がなされました。

## 6. 岡山空襲展示室開設にあたって

岡山空襲展示室 猪原千恵

・「1945年6月29日の岡山空襲後の平和祈念事業の動きについて」として、6月29日を中心としたマスコミなどによる報道、節目ごとの平和祈念行事、刊行物作成、展示会などについて報告がありました。「岡山空襲の記憶を伝える」としては、「第29回岡山戦災の記録と写真展（2006年6月）」以来、岡山市デジタルミュージアム（現岡山シティミュージアム）との協働事業となり、2012年10月1日の「岡山空襲 展示室」の開設に至る経緯について紹介がありました。又、「岡山空襲展示室の現在と今後の課題について」として、現在の業務、寄付資料の受入・管理・収蔵、データ管理、常設展示の運営などについて報告がありました。

### 【感想】

今回、全国のさまざまな戦争遺跡の現状や、保存運動などを進める会の状況について、共通の問題があることや、それぞれの遺跡が抱える個別の問題があることが分かり、大変勉強になりました。戦後70年近くが経過し、新たな開発が進んで来ている中、戦争遺跡の保存は脅威に晒されており、戦争当事者の高齢化もますます進み、戦争遺跡の保存と活用をどう考えて行くのか、いろいろと考えさせられ、又、知らない事の如何に多いことに気づかされたシンポジウムでした。戦争の実相を伝えて行くガイドの役割の大切さを、改めて認識することが出来ました。

## ○現地見学会報告

### ○倉敷一日コース(健脚向き) 大西章(運営委員)

朝9時に集合場所である水島愛あいサロン駐車場に集まる。健脚向きコースと銘打っていたが、年配の人が多かった。健脚と年齢とは比例しないと考え直し自信を持って、30人の方々と出発する。

この水島地域は高梁川の河口の三角州であり、また西と東に分かれていた高梁川の東側を埋め立て、1941年に三菱重工業名古屋航空機製作所の一部が移転し、巨大軍事工場地帯になった。

亀島山はその三角州にある標高91mの小高い丘である。2つの丘が繋がり亀のように見えるので亀島山と呼ばれている。その丘に登ると水島地区が一望できる。現在も西から東まで工場が並んであり、また工員住宅の町並み、飛行場跡など当時の名残も現存していることがよくわかる。



亀島山地下工場内トンネル



亀島山地下工場工作機械設置跡

この水島航空機製作所は戦争末期に空襲を避けるために工場の分散疎開が始まり、亀島山地下工場、松工場群、鶴工場群などがつくられた。亀島山地下工場は主に朝鮮人によって掘削された。当時の過酷な作業は地元高校生の聞き取り調査などで明らかになってきた。地下工場は東西方向に30m間隔で5本、南北方向に15m間隔で28本、全長約2000mのほぼ素掘りのトンネルでつくられている。1945年4月に工作機械が持ち込まれ、実際に作業が行われた。現在は落盤の危険もあり、ごく一部が調査のため入坑が許可されている。中に入ると工作機械を据え付けた跡、配電用碍子の破片などがあつた。



亀島山地下工場の碑

塔が残されていた。(給水塔に行くまでの山登りが健脚コースの理由でした)

鶴工場群はコンクリート製の構築物がみえたが、中には入れませんでした。その傍に完成した紫電改が一機格納されたとのことでした。

軍事工場、軍事地下工場、そして高角砲が取り巻く、まさに軍都としての水島でしたが、その戦跡を平和教育に活用する取り組みが、行政、民間を中心に熱心に行われていることがわかる見学会でした。

詳細は『亀島山地下工場を語り継ぐ会』HPを参照して下さい。

(<http://www8.plala.or.jp/tannhauser/index.html>)

### ○倉敷・岡山1日コースに参加して

中澤正子(運営委員)

8月19日9時、昨日までの会場「水島愛あいサロン」脇の駐車場に集合した。私は3コースのうち(2)倉敷・岡山1日コースを選んだ。戦時中疎開したのが同じ中国地方の島根県の宍道町、岡山は表玄関で昔から興味をいだいていた。

3コースとも最初は同じ戦跡を巡るため、時間差を設けて上手に誘導してくださる。巡る道中、仲間を見つけて言葉をかわし、なかなか面白い雰囲気だった。

倉敷(水島)での見学をおわり、一路岡山へ。田園風景の真っ只中を走る。このあたりは丘陵地に弥生時代の遺跡が発見されており、田圃は江戸時代末ごろから泥沼が干拓されて美田に変わったとか。昼食はホテルのバイキングの予定だったが、時間的に折り合いがつかず隣のレストランでとる。

★いよいよ第17師団の見学である。岡山大学キャンパスに入るとすぐ旧衛兵所(現岡大情報展示室)があり、そこの説明から始まった。2006年に戦争遺跡として国登録有形文化財に指定されたとか。以下キャンパス内の17師団の戦跡を巡る。

★第17師団についてレジュメによれば「日露戦争後の1907(明治40)年、我が国は陸軍6個師団の増設を決定し、岡山に第17師団が新設されることになりました。用地として、当時御津郡伊島村の水田地帯が選ばれました。5月決定、8月整地、翌年3月には部隊の収容が始まるという突貫工事で、一帯は南側の練兵場(現県総合グラウンド)を含めて、兵営や倉庫の立ち並ぶ広大な軍事基地となりました。第17師団は25(大正14)年、世界的な軍縮の中で廃止されますが、その後も軍隊の駐屯

玉島砲台は弾薬庫と2つの12.7センチ高角砲台跡を見学した。弾薬庫はアーチ型で奥行き10mのコンクリート製のトンネル構造になっており、非常にしっかりとした弾薬庫でした。砲台は直径約10mの土塁状の高まりの上に高角砲が据えられ、まわりに弾薬庫が設けられていたとのことでした。現在は米軍に壊され、中心は窪んで、そのまわりの壁に弾薬を置いたとみられる窪みがあった。

松工場群はプレス加工などが行われていたが、現在はプレス機の台座があるのみでした。その他に工具箱などの遺物も残されていた。松工場群の山腹には給水



玉島砲台跡



広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫



は部隊の変遷を経ながら敗戦まで続きました」とあり、端的にすべてを言い尽くしている。

★第17師団司令部→連隊司令部(現岡大研究推進・産学官連携機構)2003年に移築補修され、使用されている。▼雰囲気のある建物。保存されていて本当によかった。

★工兵第10連隊将校集会所庭園 池と築山、石灯籠が残る。▼夜道池に落ちたら大変。

★同連隊橋梁演習場 レンガ造りの橋台と橋脚が残る。▼こんな訓練が行われていたのか。

★工兵隊浴場と食堂棟(現考古資料館) 赤レンガ造り。東半分が原型に近い。

★広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫 ▼厩舎として現役の倉庫。本当に馬がいた。

★コンクリート高塀 当時津山線法界院駅から引込み線があり(現岡北中学校)、兵器廠に運び込まれた資材の荷解き場を隠すためのものとも伝えられている。▼思わず刑務所?と。

★砲身型軍人勅諭下賜五十周年記念碑 1932年、勅諭発布50年を記念し、兵器廠職員一同が建てたもの。「忠節・禮儀・武勇・信義・質素」と刻む。敗戦時、文字部分が削除されたが現在は復元。▼はじめて見る印象深い碑。

★レンガ造りの門柱 第17師団砲兵の連隊門と思われる。▼説明がなければ通過しそう。

▼見学会は終わった。猛暑の中、広い広いキャンパスと軍事施設の関わりを考え続けて、ひたすら歩いた。「落伍者もなく終わったよ。みなプロだねえ」と言う声が聞えてきた。

## ○岡山大学を含めた、自分だけの戦跡めぐり

石橋 星志(運営委員)

戦争遺跡保存全国シンポジウムのフィールドワークは、倉敷一日、半日、倉敷・岡山の3コースがありました。倉敷・岡山コースの後半は、岡山市の岡山大のキャンパス内に残る第17師団(のち歩兵第33旅団、岡山連隊区)関係の戦跡めぐりでした。

そのコースには参加できませんでしたが、大学のキャンパスに残る戦争遺跡を調べているので、大会の前後に岡山大学と空襲で焼失した旧制の六高の跡を見ようと考えました。その後、岡山シティーミュージアムにある、岡山空襲資料室の猪原千恵さんのご教示とお貸しいただいた自転車、岡山の戦争と戦災を記録する会の片山和良さんからの資料提供で、空襲関係の遺跡の情報も見てから回ることができました。

陸軍墓地はタクシーで移動する必要がありましたが、新興住宅街とため池の間の小高い丘がそれでした。管理状態は良く、大半の墓石は刻まれた文字も読める状態でした。

六高記念館は、出身戦没者222名を掲げた額や遺影なども展示され、戦時下の日誌も展示されているなど、閉館時間を押して見せていただきましたが、短時間の見学しかできなかったのが残念でした。

岡山大学内の旧陸軍関係の施設は、1990年代よりは減ったというものの、木造建物も元兵舎が馬術部の馬房として、衛兵所が情報展示室として現存していました。医学部キャンパスになっている鹿田は、戦前は岡山医科大学があった場所で、空襲にも遭った建物が現存していました。全体として登録文化財となっているものも散見されました。説明板もあるところもあり、空襲については23カ所に説明板が設置されているなど、先進的な印象でした。

大会の前日と3日目の半日フィールドワークの後に見て回ったところは以下の通りです。

16日。ノートルダム清心女子大学(当時は女学校。教会と一部校舎が現存。空襲時は迷彩塗装)、岡山県総合グラウンド事務所(偕行社)、練兵場造成工事殉難者慰霊碑(県総合グラウンド内、グラウンド自体が練兵場)、新野公会堂・岡山歩兵連隊史跡碑(騎兵第21連隊将校集会所)、岡山大学津島キャンパス(旧事務局庁舎→師団司令部建物の一部、情報展示室→第17師団衛兵所、空き地→工兵第10連隊将校集会所庭園跡、空き地→工兵第10大隊橋梁演習用施設跡、文学部考古学資料館倉庫→工兵第10連隊浴場・炊事場、二部校友会ボックスほか→工兵第10大隊本部、工学部第8・9講義室→岡山陸軍兵器補給廠・のち広島陸軍補給廠岡山分廠北倉庫炊事場、工学部15号館→岡山陸軍兵器補給廠・のち広島陸軍補給廠岡山分廠衛兵所、広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫兵舎→岡山大学馬術部馬房、軍人勅諭の碑、コンクリート高塀、門柱→山砲兵第2大隊表門、歩兵第10連隊通用口?、広島陸

軍兵器補給廠岡山支廠第一通用門、土塁)岡山陸軍墓地、岡山大学鹿田キャンパス(旧岡山医科大学、空襲罹災も建物現存)、田町橋(空襲罹災)、禁酒会館(空襲から焼け残る)、旧日本銀行(空襲から焼け残る、迷彩塗装)。

19日。京橋(不時着陸場にするため欄干の一部を破壊)、奥市公園運動場旗台(大日本婦人会岡山市支部寄贈)、岡山県護国神社、岡山朝日高校(旧制六高は空襲で罹災、校門、書庫、柔道場が焼け残る。六高記念館に出身戦没者の展示)。

参考文献：中村大介、野崎貴博「津島岡大遺跡の調査研究」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要』2005(岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、2007)

岡山の戦争と戦災を記録する会編『今に残る街角の証言者 改訂』(岡山の戦争と戦災を記録する会、2007)

西川宏、角田茂「岡山市内に遺る戦争の爪痕」文化財保存全国協議会編『明日への文化財』38号(文化財保存全国協議会、1996)

「市内に残る戦災の遺跡」(岡山市ホームページより)

### 報告 航空本部等地下壕出入口工事状況

長谷川崇(運営委員)

まず「6aの出入口は保存された」 工事開始以来早くも5ヶ月が経過しました。一番心配していた6aの出入口(破壊された7aの右側)が残された事は重要な意味がありました。さてその後工事が進められ土留めのコンクリートの擁壁、6月に一部測量調査などがあり、排水用土管(長さ60cm×20cm径)2本、と当時使われていた錆びたスコップなどが見つかりました。

その後7月に入り敷地内の通路工事(排水溝、柵、奥の階段等)が進められていましたが、8月15日に業者より近隣の住民に8月末にて工事が終了とのことのお知らせが配布されました。(8月26日に修理が終わりました)

その後残された建築物等その他については全く不明ですので今後も現場の状態を注視していきます。(8月27日現在)



工事現場(2013.8.27)

### 寄稿 元暗号兵・新井安吉さんからの手紙

新井安吉

(2013年4月17日の見学会に参加の前に頂戴したお手紙を転載します)

前略

突然のお便りお許し下さい。

私は新井安吉という今年82歳の老いばれです。今度68年の悲願がかない日吉地下壕を見学させていただくことになりました。

昔の勤務先の仲間(代表・宮崎安基さん)の努力で実現されるのです。今仲間達に対し感謝の念で一杯です。

思えば14歳の時海軍特別年少兵として横須賀海軍通信学校に入りました。そして約3ヶ月間新兵教育と称する筆舌に尽くし難いような過酷な訓練を課せられ、その後愛知県豊川市の通信学校豊川分校で暗号教育を短期間で修得させられたのです。そして1945年5月下旬頃だったでしょうか連合艦隊司令部付を命ぜられたのです。巡洋艦(大淀)に乗艦するののかと思いきや、直前に日吉行に変更されたのです。その時私は海軍なのに何故陸上なのか理解できないまま、電車を乗り継ぎ日吉駅に降りたのです。そしてあの巨大地下壕を目の当たりにし驚嘆してしまいました。そして心の片隅で日本はここまで追い詰められているんだと思いました。然し口に出すことなぞできません。

それにしてもあの地下壕何時頃、誰によって造られたのでしょうか……

そして翌日から執務は地下壕、日常の居住区は外のカマボコ兵舎での日々を送ったのです。

私は着任早々班長付を命ぜられました。青森県出身の方で小笠原藤太郎上等兵曹で50代半ば位だったでしょうか。ご家族は東京大森に住んでおられました。大変温厚な方で私は特別に目を掛けていただきました。例えば新任の者は通常、秘クラスの暗号しか手掛けられないはずなのに「新井やれ」とその上の軍機クラス迄も扱わせていただきました。又10日に1度位の外泊をされた時には必ず何か持ち帰られソット「新井食べろ」といっていただいたりもしました。

然しそうしたことが原因だったと思いますが古参兵によって今でいう体罰を加えられたのです。ある時なぞ勤務を終えホットしている時、古参兵に通常の入口とはまったく異なる入口に連れていかれ4人の古参兵から本当に耐え難いような制裁を受けたのです。「貴様の日頃の行動、軍人の恥だ、叩き直してやる」顔面を代わる代わる殴られました。口の中は完全に切れ、何度倒れそうになったかしれません。拷問といってもよいような激しいものでした。

古参兵の妬みだったのでしょうか。こうしたこと日本の軍隊には昔からあったようです。「班長に言ったら、ただではすまないぞ」当時の私はどうすることもできませんでした。

短い期間でしたが、私には忘れることができない地下壕、様々な思いの詰まった地下壕、今迄何度も調べたりもしたのですが、見学については実現できませんでした。それが仲間によって可能となったのです。生きていて本当に良かったです。仲間に対し心から感謝しております。

それにしても保存会の皆々様、大変ご苦勞もあられたことでございましょう。本当に良くぞ保存して下さいました。後世に「戦争とは何か」を伝えることができ得ることでしょう。本当にありがとうございました。心から厚く御礼申し上げます。

新井 安吉

追伸

終戦時、海軍上等兵でした。又復員の時予備役編入の辞令を渡されました。

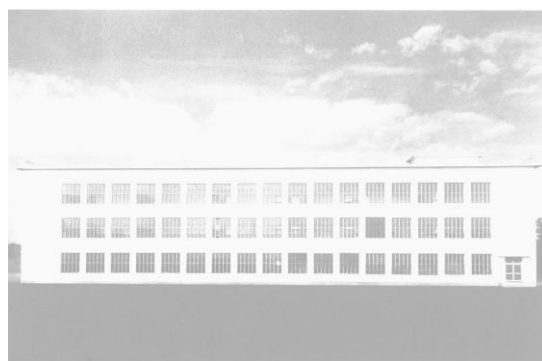
## 報告

### 取り壊される普通部本校舎を見学して

阿久沢 武史(運営委員)

慶應義塾普通部の本校舎は、谷口吉郎(1904—1979年)の設計によって昭和26(1951)年に建てられた歴史ある建物ですが、このたびの新築事業に伴い、取り壊されることになりました。今回、解体作業が進む中であるにもかかわらず特別に見学が許され、同校主事藤森孝俊氏のご案内のもと、8月31日(土)16時より日吉台地下壕保存の会のメンバー10名で見学することができました。

そもそも「普通部」という名称は、明治22(1889)年に慶應義塾が「大学部」を設置するにあたって、従来からある過程を「普通部」と称したことに始まります。その後、幼稚舎からの一貫教育が確立される中で、旧制中学の校名となり、そのまま戦後の新制中学に引き継がれました。慶應義塾の中等教育の根幹に位置する伝統ある男子中学校です。もともとは三田綱町にありましたが、戦災で校舎を失い、戦後の日吉移転にともない、近代的な校舎として建てられ、多くの人材を育みました。



普通部本校舎(谷口吉郎設計)

建築家谷口吉郎は、日吉寄宿舍の設計者として知られています。谷口と慶應との関係は深く、他に幼稚舎校舎、幼稚舎自尊館、三田キャンパス第二研究室(ノグチルーム)など多数にのぼります。昭和12(1937)年に完成した日吉寄宿舍は、若き日の谷口の作品であり、新しい学園都市の構想のもと、見晴らしのいい丘の上で伸びやかに若者を育てたいという理想を具現化したものです。今回、普通部本校舎を見学し、屋上から遮るもののない四囲の風景を眺望し、あらためて建築家としての谷口の理想にふれる思いがしました。本校舎の外観は白い外壁の3階建鉄筋コンクリート、いっさいの装飾を排したシンプルな箱



型の建物です。窓が規則正しく整然と並び、機能性を重視した合理的な近代建築であり、寄宿舎との共通性が随所に感じられます(写真は竣工時の校舎全景、普通部HPより)。それとともに校舎内部の廊下の壁の配色、階段に取り付けられたタイルの滑り止めなど、日吉キャンパスの第一校舎との共通性も感じられました。モダンにしてレトロ、シンプルにして重厚な建物の中で、男子中学生たちは60年にわたってどのような夢を描いてきたのでしょうか。

それにしても、取り壊される前の校舎というものは、もの悲しいものです。過ぎ行く夏の西日が、誰もいない長い廊下に射し込み、記念のために床から剥がされたという木のタイルの跡に影を落としていました。建て替えの理由は、新たな教育を展開するうえで新しい校舎が必要になったということですが、教室の広さも理由の一つにあるようです。現代の中学生の身体の大きさが、教室に合わなくなった。これは設計者谷口にとっては予期せぬ誤算でしょうが、若者を伸びやかに育てたいという彼の理想は、その意味で実現されているのかもしれない。

**連載****地下壕設備アレコレ【9】送信機**

山田譲(運営委員)

日吉の連合艦隊司令部の通信隊は、基本的には受信専門です。しかし司令部である以上、各艦隊、航空基地にたいして軍事作戦上の命令を出さなくてはなりません。国内であれば電話線をつかって電報を送ったり、電話で直接話すこともできます。しかし海外の部隊にたいしては無線通信です。司令部を軍艦にいていたときは軍艦の通信機で送信していました。この場合、電波の発信位置は米軍によって簡単に探知されてしまいます。ですから陸上の日吉から送信したら、日吉に連合艦隊司令部があることがすぐわかってしまいます。

そのため送信は千葉県船橋などの海軍送信施設を使っていました。では日吉にいてどうやって遠方の送信所を動かすのでしょうか？

このことについて連合艦隊司令部電信員だった下村恒夫氏は「当電信室から東京通信隊へ有線（モールス）で送信、東京通信隊から全会戦地域に放送されたのである。ただし緊急最重要な作戦下命は地下電信室からケーブルを介して当科員が東京通信隊の送信機を直接動かして全海軍宛命令が伝達できるようになっていた。」（慶應義塾生協ニュース第69号）と投稿で書いています。

ではこの「ケーブル」とはなんのでしょうか？ これについて前回も登場した連合艦隊情報参謀中島親孝元中佐は「日吉では東京通信隊の送信機の一部を直接つかえるように管制線をもうけた。」「有線と無線の管制装置で東京通信隊の船橋送信所、横須賀通信隊の六合（六合の誤り――山田注）送信所の送信機をはたらかせる施設は十分その機能を発揮できた」（『聯合艦隊作戦室から見た太平洋戦争』光人社）と書いています。しかしこの「管制線」あるいは「有線と無線の管制装置」というのは何なのか、私にはよくわかりません。ただ中島氏はこの本の別のところでパラオ諸島の地上基地での出来事として「第三通信隊の地下に埋設した管制線が爆弾のために切断されて応急修理完成まで通信不能となってしまった」と書いています。ですから管制線というのは通信ケーブルなのだとおもわれます。

しかしここで新たな疑問が出てきます。日吉から船橋まで、あるいは戸塚や藤沢市六合の送信所まで、専用の通信ケーブルを延々と引くことなどありうるだろうか。引いたとしても相次ぐ空襲に耐えられるだろうかということです。これは電話局の電話回線の一部を送信のための専用線として確保しておいて「管制線」として使ったということではないかと私は推測しています。また「無線の管制装置」となると、ちょっと理解不能です。電波の届く範囲の狭い長波で送信すれば米軍は傍受しづらいかもしれませんが、日吉から電波を出すのはやはり危険だろうとおもいます。

日吉からまちがいなく作戦命令は電波に乗せて発令されているのですが、どういう通信設備を使って船橋その他の通信隊の送信機を作動させていたのかは、まだまだ分からないことが多いのが現状です。

（注――「有線」とは電線ケーブルで通信すること。「無線」は電線無しの電波通信です。）

## ★活動の記録 2013年6月～9月

- 6/29 ガイド学習会(菊名フラット)  
 7/2 地下壕見学会 東本郷日鋼自治会 43名  
 7/4 地下壕見学会 セカンドライフクラブ 22名  
 会報111号発送(慶応高校物理教室)  
 7/8 地下壕見学会 慶応大学福沢センター設置講座② 40名  
 7/13 日吉の戦争遺跡ガイド養成講座(来往舎会議室)修了者3名  
 7/17 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会(慶応高校物理教室)  
 7/19 地下壕見学会 ユーコープ虹の会 18名  
 7/22 地下壕見学会 歴史教科書にたいする<もうひとつの指導書>研究会 10名  
 運営委員会(慶応高校)  
 7/27 定例見学会 48名  
 7/30 地下壕見学会 愛知学院大学 15名  
 8/3 夏休み地下壕見学会 45名(下田小学校はまっ子ふれあいスクール他)  
 8/5 夏休み地下壕見学会(午前・午後)55名(ヒヨシエイジ他)  
 8/6 地下壕見学会 もえぎ野中学校 20名  
 8/7 夏休み地下壕見学会 55名(田園荏田教会、新婦人の会港北支部他)  
 8/9 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会(法政第二高校教育研究所)  
 8/14 運営委員会(慶応高校)  
 8/17～19 第17回戦争遺跡保存全国シンポジウム岡山倉敷大会(水島愛あいサロン環境交流スクエア) 参加者11名  
 8/31 定例見学会 71名 慶応普通部校舎(谷口吉郎設計)見学 10名  
 9/5 地下壕見学会 日吉本町西町会 39名  
 9/6 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会(法政第二高校教育研究所)  
 9/7 ガイド学習会(菊名フラット)  
 9/9 運営委員会(慶応高校)  
 9/11 地下壕見学会 私鉄労組神奈川東京ブロック 37名  
 9/13 地下壕見学会 藤沢市平和の輪をひろげる実行委員会 23名  
 ○8/7 読売新聞に紹介記事(開発工事に関して 安藤先生)  
 ○8/18 テレビ BS11「今も残る大日本帝国の遺跡」(大西会長・新井副会長)



夏の見学会  
3点セット

★予定 9/20 会報112号発送(慶応高校物理教室)

## ○ 定例見学会

(9/28・10/26 締め切りました)・11/30(土)・12/14(土)

10/12(土) 平和のための戦争展関連見学会 9:30～

☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで TEL045-562-0443(喜田 午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 TEL045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町 2-1-33 TEL045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上  
 発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 0250-2-74921  
 代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会  
 日吉台地下壕保存の会運営委員会